



TITLE:

人糞尿の國益

AUTHOR(S):

財部, 靜治

CITATION:

財部, 靜治. 人糞尿の國益. 經濟論叢 1919, 9(1): 87-93

ISSUE DATE:

1919-07-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127547>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號一第 卷九第

行發日一月七年八正大

- | | | |
|---------------------------------------|------|-------|
| 庭園都市に就いて…………… | 法學博士 | 田島 錦治 |
| 支那投資の國際的共同…………… | 法學博士 | 戸田 海市 |
| 住居税と公平負擔…………… | 法學博士 | 神戸 正雄 |
| 社會政策より觀たる我國の財政…………… | 法學博士 | 小川郷太郎 |
| 人糞尿の國益…………… | 法學博士 | 財部 靜治 |
| マルクスの唯物史觀 <small>に</small> 生産の意義…………… | 法學博士 | 河上 肇 |
| 植民地の勞働政策…………… | 法學博士 | 山本美越乃 |
| ベンチーの組合社會主義論…………… | 法學博士 | 河田 嗣郎 |
| 明治の米價調節…………… | 法學士 | 本庄榮治郎 |
| 海運と國民經濟…………… | 法學士 | 小島昌太郎 |
| 最近の出産率減少に就いて…………… | 文學士 | 高田 保馬 |

人糞尿の國益

財部 靜治

前世紀の始めに至る迄、人口の増加は一般に、一國の勢威及文化増進の兆と想はれ、歐洲諸國政府は、出來る丈けその増殖を助勢せんとし、かくて一國の幸福は、國民口數の増加に従ひて、増大すへしとせるかために、土地の生産力か、經常狀態の下人口増加と、步調を同じうし得るに至るへきことに付ては、何人も憂うる所なかりき、此時機に際會し、悲觀の傾向ある學說を説き出せるは、恰も英國經濟學正統派の驍將なり、而もリカードーか分配論に關して、之を説けるに反し、生産論上悲觀的思潮を容れ、人口増加の勢急なるを認め、土地生産力之に及はざるを憂ひて、世に養はれざるの人、多きに至るへきことを警告したるは、人の拾ねく知る如くマルサスなり、然るに前世紀の中葉に至り、悲觀の事由を、主として土地生産力におき、地力の耗盡を説きて、國の滅落を警告せるは、實に獨逸の學者リービヒ其の人なり、乃ち氏は現在の農業經營法によりては、生産せらるゝ食糧の分量、大體に増さゝるのみならず、寧ろ時を経るに従ひ、必然

減すへしとし、かくて増せる國民か、農作により最早充分なる食糧を得ること能はざる時期、著しく早く起り、引いて戦争及飢饉の爆發となり、現存人口を減少せしめ、その結果食糧に不足を告げざるか如き、程度に及ぼすへきや、期して待つへしとしたり。改良の望あるを認めしを以て、純然たる悲觀論者と評し去るは、酷なるへしと雖も、その論旨に悲觀の傾向を宿せるは、マルサスと異なるなし、而も亦マルサスか既に、食料に餘りに重きを置き、一國人口の増減に及ぼす影響を、殆んど之のみに歸せんとせるの趣あるに、リービヒはその點に付、更に一步を進めたり、乃ち氏によれば、諸國民の興亡に影響すべきもの、一言にして盡さは、歴史を作るものは、土地產出力のみたり、濫作 Raubbau. 詳言すれば、従前通りの收穫高を擧げしむへき能力を、土地より奪ひ、之を續くる間に、全然又永久に土地を不毛ならしむへき耕作法は、古代の帝國を没落せしめたと共に、今や將に轉近諸國の基礎を、危うせしめんとしつゝありとしたり、氏はその當時第一流の化學者たりしのみならず、その著書極めて精到又明快に、その警告を宣傳し、俗人にも亦解し易く、入り易きものありしより、多方面の注目を惹き、又各人は歐洲の將來に關する、氏の主張の重大なるを覺るの外なかりき、今此點に關する氏の所説を、その儘借ることゝせんに（所載の條を原譯 Die Chemie in ihrer Anwendung auf Agrikultur und Physiologie H. 獨逸民顯市に抑留せらるゝを以て、今姑く同書英語 The Natural Laws of Husbandry, ed. by John Blyth, '63. pp. 237, 238 にて）曰く

不偏なる心を持し、農業の狀態を商量する人にして、克く賢明ならば、農業が歐洲に於て達し得たる階段に付、一刻と雖も疑を挿むことなかるべし、吾人は世界の諸國諸地方中、土地を永續肥沃の狀態に、恢復せしむることを忘れしものは、凡て人口最大密度の頂點に達せる後、荒蕪不毛の狀態に没落す、夫れ歴史家は國民の滅落を、政治的事件及社會的原因に歸せんとす、素より是等はその結果を生むに、預りて力ありとすへきも、吾人は茲に疑問を挿み得べし、別に又一層深玄にして、歴史家により認められざる原因あり、諸國民の生活上、此事件を惹起せしものならざるか、又諸人種間に於て、互に存亡を賭せる戰爭は、多くは嚴峻なる自己保存の法則に本つき、湧き出てしに非ずやと、素より皮想なる觀察者には、或は映せん、國民は人と同じく、少より老に入り、次いで死滅するものなりと、されどその經過を、今少しく審かに検査せんか、吾人は看取すべし、自然か土地に宿せる、人類維持の諸條件は極めて制限せられ、直ちに耗盡さるべきことを、かくて又地上より亡び行きし諸國民は、是等の諸條件を、如何に擁護すべきかを解せざりしかために、自らその墳墓を掘れることを覺るべく、之に反して生存の是等諸條件を、擁護するの途を解せし諸國民、假令は支那及日本は、死せざるを覺らん。土地自然の肥度につきては、人力の及ぶ所に非ずと雖も、その肥度の生命は、人意の力以内にあり、一國民が肥度引續き、遞減し行く國土に賴り、漸次に滅落

し行くや、或は強大なる人種なるかために、生存條件に富める、一國土に就き、その土地を亡ぼして、之に代ることにより、その生存を維持するや、二者大に異なるか如きも、その最終結果に於ては、相去ること遠からず

と、次に歐洲に於ける、人糞尿利用の實例を引き、その要度を論して曰く（前掲書二七四、二七五頁
參照）

諸都市住民全部の人糞尿を、少しの損失なくして、悉く蒐め取り、次いてその内より、各農民かその初め、都市に供給せる產物を本として、生せし部分を、その農民の還すの途ありとせんか、土地の生産力は、將來幾年代を通し、殆んど毀損なく維持され得べく、又肥沃なる各農場に、現存せる礦物質の貯へは、増加し行く人口の欲望を、裕に充たして餘りあるへし、兎に角今日、土地が栽培されたる作物を養ひし、礦物質の損失に付、適當なる肥料の適量を施し、之が補填を圖る農民數、全農民に比して輕微なるに拘はらず、その貯へは、今尙國民の欲望を充たすに足れり、されど今日無分別にして、地力還元の大自然法は、自己の農場に適用されすと、信する人々の眼にも、是等礦物質の貯へ不足せること、可なり重要視さるべき時期は、晚かれ早かれ來らん、而して此點に關する親の罪は又、その子に至りて罰せられん、此種の事項に關する積年の惡習は、餘りに根深きかために、吾人の良判斷を晦ませ易

し、堆肥に落下する雨は、莫大の銀貨を洗ひ去ること、又今日家及村の里道の空氣を毒害すへきものを、その農場に遷すを得は、一層有利なるへきことは、最も暗愚なる農民も、熟知せる所なれど、彼は之に頓着せず、諸物質か由來常に、成行く儘に成行けりとの理由により、之を成行く儘に放任す

と、かくて又普國の東亞探檢旅行員 H. Marion の、本邦施肥法を讚稱せし、一八六二年の發表に係る報告書を收録したり。而して英譯者も亦、序言中説いて曰く、

人糞尿は田舎より、賣られたる穀物のみならず、家畜に含まれし礦物質一切を含む、吾人にして、若し是等の人糞尿を、土地に還し得たりとせば、動植物生存條件の、完全循環は遂げらるべく、農場は永久肥沃の狀態に保たるへし、此問題は支那人及日本人により解決せられたり、旅行家により記述せらるゝか如き、支那の田園生活、并にマロンの筆になる、日本農法に關する報告は、如何に人糞尿利用に長せることを、語れりとするも、吾人は之に促され、是等東洋人の方案によれる、農事改良を望ましむるに至らざるへし、その施肥法如何に貴ふへしとするも、輓近文明の要求あるかために、家庭のあらゆる快樂を犠牲として、之を買ふか如きは許さるへし

と、兎に角是等學説を生むの、土臺となりしは、化學の原理にあり、リービヒは之か立證を歴史及統計に求め、その結論は經濟上政治上重大の關係あり、従ひて肥料論又は所謂地力維持論

Stark の見地より、氏の根本原理を評論して、その所謂礦物説の不備、并に施肥に關する化學的變化及生物學的變化の、該要を瞥見し、引いて氏の諸結論に付、經濟上の評論を施すは、意義なしとせざるも、吾人か本論に於て問はんとするは、茲に非ずして、人糞尿の利用にあり、而もリビビの所説を中心として、評論せんとするにはあらで、本邦に於ける利用及その推移の、本邦國民經濟上に於ける意義を、聊か究めんとするにあり。

二

天保八（一八三七）年の序を付せし都繁昌記中、擔尿漢ウツリモノの説明に曰く、「平安大數十萬家、工商十居七八、蚤興遲寐、」「整頓其所、」街奴俗稱番戶、番太亦已破曉清中街、不レ留寸芥點塵、坦々蕩々、似爲我都潔淨可見於此者、爾時有小賤夫、擔尿桶セウベンケイ一雙及小籃、盛以三時新菜蔬、公然高叫過、其言急且略、所謂侏離缺舌、頗不可辨、諦聽則小三便子大根、小三便干茄子、小三便干菜等之語、而要之以之相換耳、所以其諸菜、總曰之換物と、かく其の場其の場の取引をなすもの以外、別に又「有二等差セ、オトナシヤ、穩貼之擔尿漢、雅與ト其家熟識、斷定一年換物、每經三四朝、必來汲糞尿去、待臘月前後、始輸送蘿蔔蕪菁之類數擔」とし、同様に又「至三扨厠漢ト亦然、以二屎糞貴干尿ト故、或報以糯米、蓋供歲終之用也、」と説き、更に糞尿を利用せる階級、誰たるかを示さんとし「此等皆都門外農佃之所業、山城一州稼穡、概出此糞培、」と云ひ、特例として「如伏見左右村民、距京稍遠、搬尿尿者每托之高瀬川船漕之歸棹、滿載數十桶、

臭氣起_レ風、順_レ流而下」ると説き、當時既に幾分か複雑なりし、都鄙經濟交互寄頼の關係を、雅致多く叙述し、別に又前記臨機の物々交換上、當時の京都に於ける嬢姐、嬌紅冶粉を凝らし乍ら、一二顆の茄子をも尙爭ひ、主張容れられずんは、嗔りて桶を傾け、還瀉せしむるものあるを示し、之を評して「皆有_二京樣嫋雅之態_一、豈憚_二爭_三口氣於半桶殘尿_一哉、是無_二他都俗舊習_一、節_二縮百費_一之所_レ由、與_二江戸人隨處放尿去_一、不_二敢顧_一之豁郎氣象_上大異、」としたり、この特殊評論を聞くのみにても尙、現時に於ける両京社會事情の萬般に照して、興味津津たるものあり、而して右一編の骨子たる叙説は、やかて從來に於ける本邦經濟關係の構成を、指摘すと言ひ得べきものあり、實に我國の農業は、米を常食とし、魚類を副食物とせる消費者の都により、人糞尿を仰きたると共に、魚肥を需用すること多かりき、（經濟眼三三八頁參照）都と田舎との間、又陸と水との間、動植物生存條件の循環作用を、完全ならしめたりと評し得べきものなしとせず。而も亦時勢推移し、都市の膨脹并に之に伴ふ郊外村の膨脹及宅地化あり、市内及郊外交通機關の完備となり、農家に於ける人造肥料消費の増加となり、都市衛生及都市美振興の氣運著大なるに至りてより、「大根に小便」てふ單純關係を以て、現時の鄙都間に於ける特殊經濟關係を、語り盡し得ざるに至り、農民の嚮都、農村の人手拂底、都市労働者問題同様、國政上極めて重視すべき、諸問題を湧かしめつつあり、人糞尿に國益たるの能あるは、依然たりと雖も、之を國益たらしむべきや、廢物否始末に困るべきものたらしむるや、人の事功によりて之を決すべき、一新事情は加はり來れり。